

平成 28 年度

社会福祉法人こころの種福祉会つくばトッポンチーノ保育園

事業報告書

理事長 三上恵子

### 平成 28 年度の総括

つくばトッポンチーノ保育園の 2 年目は、子どもたちも職員も飛躍の一年となった。日々の保育に加え、行事等多方面へ充実することができた。モンテッソーリ教育を実践していくことで子どもたちだけでなく、保育者にも「アクティブラーニング」の理解を深めることができた。

保育を必要とする家庭が増え、そのニーズも多様化し、保育の本質、幼児教育の本質までもが捻じ曲げられた理解をされがちな現代日本の中で、定員 60 名のつくばトッポンチーノ保育園が「発達に即した保育・教育」を展開できたと考えている。以下に各報告をまとめる。

### 1. 平成 28 年度概要

①保育事業計画にある内容は大方遂行できた。さらに、季節に応じた保育の発展活動として、幼児用バスを利用し、遠足など園外活動を多く実行できたことなど、子どもたちの喜びにつながる活動が展開できたこと。

②家庭や地域との連携を大切にして「家庭教育」の補完をする。

乳幼児の保育に関する相談に応じ、保育園、保育者としての社会的役割を果たす。

- ・おおよそ月に一度「家庭教育研究会 Montessoriseed」を開催し、多くの在園家庭の参加があった。「今、目の前の子ども」に何が真の支えとなるかを考え、具体的な「モンテッソーリ的環境改善」の方法を伝えた。実際に家庭での家具の配置などを子どもの目線でもとらえやすい環境に工夫することで親子の楽しいやりとりにつながるなど、忙しくてもすぐに挑戦できる子育てアドバイスを送る。子育ての中で、子どもの自発力や知性を育む楽しさを実感した家庭が増えたと感じる。

- ・日々の保育の内容を養護面に限ることなく、その日のモンテッソーリ教育内容の理解と興味につながるコメントやお知らせを 3 歳以上児全員の連絡帳に毎日添付。さらにそのメッセージがより伝わるように HP の保護者ページ内のフォトギャラリーには日に数百枚のその日の活動写真を投稿し、可視化された教育を体感できるよ

う努めた。

③子ども達は整えられたモンテッソーリ教育の環境の中、自分の意思で自由に興味ある活動を選び、集中力をもって取り組みながら自分の意思通りに動く身体を育てていく。

- ・職員は子どもの発達のチャンス「敏感期」を逃さずに、知性と共に豊かな人格形成の下地となるような「応答的環境」「自発的に動きやすい環境」を整えるために研修を重ねるなど精進した。

④異年齢縦割りで学び合う経験を一層増やし、人間関係の基盤である思いやりを身につけ、責任感を育てていく。コミュニケーションを楽しむことで問題解決能力を高め、児童は幸福感に満たされるうちに「自分で考えて判断し行動できる」高い人間的資質を獲得していく。

- ・活動の大半で縦割り活動の実践をしました。各年齢の保育士同士の連携を良くし、子どもの発達を個別に十分理解することで、ダイナミックでフレキシブルな縦割りの展開が可能となったのです。保育者は、きめ細かに物的環境を整えることを配慮し、子どもの敏感期を逃さずに安全に子ども同士が関わることができました。その結果、それぞれの動きの調整、発達、人格の獲得に大きく貢献できたことをうれしく思います。さらなる工夫を重ね、子ども達の人間的な成長を支えたいところです。

⑤児童の好奇心を尊重し、興味をもたせることで自主性を育てていく。職員は連携し、モンテッソーリ教育の環境づくりを励行する。子どもの自立を促す自由かつ知的な環境を整え、子どもが自発的活動を行うための援助をする。

- ・多くの公的業務が山積する中で物的環境を日々整えることは並々ならぬことだが、過不足なく環境を整えることで、子どもを自由に活動させることができる。また発達に応じた環境設定を常にアップデートしていくことで、職員のスキル向上にも大いにつながった。職員間で協力しながら環境を整えることで会議などではできない「合意形成」も達成することができた。

当園の保育方針として子どもとの関わりを十分にとり、そして、「子どもの発達」にとって最適な環境づくりにこだわり、その力量を磨いていきたい。

- ⑥「食べること」は「生きること」。命をより良く生きるための姿勢を「食育」を通して身につけて行く。
- ・「目の前で魚をさばく、羊を解体する、土に触れる、工場を見学する、自分で作る」など体験型の食育を多々実践することができた。もちろん、突然それらの体験をさせるのではなく、入念な事前学習を行うことで、子どもたちに「命」「食べること」などを正しく伝えることができた。
  - ・「食育」として毎月きめ細かく課題を設け、子ども達の支えとなるよう研究と実践を重ねた。旬の食材の紹介はもちろん、身体を育むために必要な栄養素など、さまざまなアプローチをして子どもの好奇心と学びを支えた。

## 2. 当園の支援・研修

### ①在園家庭への支援

就学に向ける細部に至る発達課題のほか子ども達一人ひとりが前向きに人生を歩む自立に向けての成長を支えるためには家庭の支えは欠かせないもの。就労で多忙な毎日の中、幼児期のわが子とどのように接したらよいのか、具体的にどうしたら日々成長するわが子の養護ができるのか。すべてが子育ての不安要因にならないよう、少しでも「子育て」が励みとなる支援ができればと、さまざまな工夫をした初年度であった。

現代の保護者の世代・年齢を考えると、言葉だけではなく、ビジュアルをもって確認し、納得していく世代であることを念頭に置き、就労中に子ども達がどのような生活をし、どのような頑張りをしているかを伝える創意工夫を重ねた。

生活の細部にわたる情報を毎日 HP 上の保護者専用ページにて活動写真を通じ、臨場感をもって伝えてきたことから、心情・意欲・態度がバランスよく発達していることを喜ぶ保護者・在家庭の姿が日を追うごとに見受けられるようになった。さらに個別の面談など適時希望者に行ったり、問題がある子どもの場合はこちらから保護者をお呼びしたりと「面談」の機会を多くとるようにした。今では「感染症対策」「安全対策」などの点で必要物の準備や駐車場ほか園舎周辺の行動などの見直し等、保護者のご協力を仰ぐことができるようになっている。

保護者と共に子どもの発達を理解し、等身大で支えられるように連携を良くし、職員同士も子ども一人一人を正しい共通認識のもとに支えられるような関係づくりがかけがえのない保育現場の支えの要素となっている。

## ②職員の研修

長期的な法人運営に向けて有能な職員の育成が課題である。社会福祉法人職員としての自覚と行動、さらにつくばトッポンチーノ保育園職員としての保育の技術及び知識の強化・向上などを目指した研修設定をした。しかしながら多忙な職務の中で、現場で伝え合うことはもちろん、専門性を高める学びを続けるために時間を割くことは大変困難ではある。そこで職員の小グループを構成し、幾たびも場を設け、職員全員が同じレベル・質の学びが果たせるように工夫した。その結果、衛生観念などの養護に必要な学びも含め、モンテッソーリ教育などの教育面に関しても自園教育ができたことは大変有意義であった。さらに次年度は、保育園での実現が困難な「コンセンサスをとること」「幼児におけるアクティブラーニングの獲得」などより具体的なテーマをもって、研修内容の充実、研修時間の確保などの目標を日頃の保育業務を遂行しながらしっかりと果たしていきたい。

また大きな目標として職員の職業意識の向上、やりがいなどの充実のためにも保育業界にも文部科学省における「要請訪問」のようなシステムが作られることも目指していきたい。

## 3. 苦情解決のうち報告すべき事項

- ・昨年度、苦情解決委員（第三者委員）への相談はありませんでした。